

小さな一日

Wedge White







「わーっ、すごーい！お兄ん家の近くにこんなオシャレなパン屋さんあるんだ！」

「そんなにオシャレかな？」

「オシャレだよー！食べたことないようなパンがいっぱいあるし、もうお店の感じがオシャレだもん！」

こここのところ、電車に乗つて遊びに行つていたあたしたちだけど、今日はお兄の家の近場で、ちよつとしたデート。

と言つても、十分に都会な訳でどこに行つても物珍しいものでいっぱいだ。

「じゃあ楓、先にパン選んできなよ。僕は席で待つてるから」

「うんっ！ええー、どうしようかなあ。いっぱい食べちゃうかも」

お昼を食べるために入つたパン屋さんも、すつごくいい感じで、本当にこつちに来てから都會の空気を胸いっぱいに吸い込んでる感じ。

でも、空気だけじやお腹は膨れない訳で。

「よいつ、しょ。これだけ食べるねー！」

「お、おお……」

私が選んだのはショコラサンド（ココア生地のコツペパンみたいなのに切れ込みを入れて、チョコクリームとチョコダイスを挟んだ感じ）と、イチゴのタルトと、生クリームあんぱんと、パン屋さんなのにあつたモンブラン。飲み物はホットコーヒー。

「よく食べるなあ、楓」

「これぐらい普通だよー！」

「そ、そ、う？それに甘いものばっかり……」

「だつて大好きなんだもん！いつもはあんまり食べられないけど、今だけは特別！それに、ちよつとぐらい太っちゃつても、どうせ動いて痩せるもん」

「なるほど。じゃあ、僕も選んでくるよ」

「うん、待ってるねー！」

「いや、先に食べてくくれても……」

「ダメ。お兄と一緒に食べたいの」

「……そつか」

「そうだよー」

だつて、これはデートなんだもん。一緒に食べて、感想を言い合いたいし、なんなら食べさせ合いつことか……。

「あ、あたし、すっかり甘々脳だなあ……」

ふと、冷静になつてそんなことを考えてしまつた。でも今までほんなことできなかつたら……本当になんでも、できることをしたい。

「おかえりー。このお店、慣れてるの？」

「まあ、結構利用してるかな。最近はそんなに来てなかつたけど」

戻つてきたお兄がトレーに乗せていたのは、ワインナードッグと、あたしと同じショコラサンド。お兄も好きなのかな、チョコ。

「お兄は紅茶派なんだね」

「コーヒーっていうか、ミルクの後味が苦手だから。紅茶もレモンティーで……あつ、でも楓もブラツク？」

「えへへー、そうだよ。すごいでしょ！」

「いや、すごいつて言うか……無理してない？」

「してないよ。あたしもミルクコーヒーツてそんなに好きじゃないんだよね。だから、ブラツクにお砂糖だけ入れるの。そしたらこれが、甘いお菓子に合うんだよねーー！」

「わかるわかる。僕も今度、同じ飲み方してみようかな」

「わーつ、お揃だー！じや、いただきます！」

「いただきます！」

お兄は順当にウインナードッグから行くけど、あたしはどうも甘いパンだから好きなものから食べちゃう。とはいって、どれにしようかなー……と悩んだ結果、イチゴのタルトにした。

「んつ、おいしい！うわーっ、ホントのタルトだー！ちゃんとした生地！」

「はははっ、スーパーのとかは生地が薄かつたりするからね」

「うんうん、しつかり分厚くて、でも甘くておいしー！お兄つていつつもこんなのに食べてるんだ。ずるいかも……」

「いや、毎日じゃないよ、さすがに」

「でも、結構食べてるとしょ？それに、他のお店も美味しくてオシャレなものが食べられるんだろうし、いいなー。毎日がキラキラ輝いてそう」

「……輝いてる、か」

「うん。そう思わない？」

「そうだな……僕はあんまり考えなかつたかも」

そう言うと、お兄はちょっと寂しそうに俯いた。

「こういう景色や、物に溢れているのが当たり前すぎて、それが楽しいとか、そういう風に感じてなかつたな。でも、楓と電話するようになつて、こうして実際に色々と見て回つて……当たり前の毎日は、こんなに面白いものだつたんだな、つて思えたよ。……本当、毎日がキラキラだ」

「そつか、そだよね。……でも、あたしがおのぼりさんやつてて、お兄の毎日が楽しくなつてるなら嬉しいな。だつて、同じように楽しめてるつことだもんね！」

「本当に。……本当、楓のお陰だよ。つまらない毎日が、楽しくなつたから……」  
そう言つて笑うお兄の表情も輝いていて。

あたしは、本当に好きだなあ……つて思つた

「ね、お兄。あんぱんつて食べられる？」

「うん、結構好きだけど」

「じゃ、あーん！ 食べさせたげる！」

「はははっ……なんか恥ずかしいなあ」

「あたしも恥ずかしいよー。でもね？」

「うん……あーん」

「どうぞ！」

照れて真っ赤になつてるお兄の口に、ちぎつたパンをぐいっ、と押し込んだ。

「んつ……美味しいよ。ほら、楓も」

「お兄が食べさせて？」

「……しようがないなあ。あーん」

「あーん！ はむうつ！」

「こらこら、急いで食べすぎ」

「んふーっ！おいしー！」

それぞれ食べさせ合いっこして、同じものを食べる……それがなんだか楽しくて、嬉しくて。なんか、泣きそうだった。全然感動することじやないってわかつてると。でも……。

「お兄。今度、こっち来てよ。船磯のいいところとか、友達とか、いっぱい紹介したいからさ」「うん、また行きたいな。……というか、ほとんど行つてないんだけど」

「不便だからねえ。来るだけで疲れちゃうよ。……でも、お兄に見てもらいたいものがいっぱいあるんだ。だからさ」

「うん、きっと行く。泳ぐのは得意じゃないけど、海も行きたいな」

「おおー？ それって、あたしの水着が見たいって言つてるー？」

「まあ、見たいかな……」

「あははっ、素直なんだから」

「だつて、遠慮してたら意地悪して見せてくれなさそうだし」

「まあねー。わかつて見せないもんね。きっと」

「だから、欲望は素直に伝えておこうと思つて」

「うんうん、その方がいいよ。……あたしも、自分に素直になつたんだからさ。我慢しても、なんにもいいことないよ。……つまらない意地張つてたら、こうやつてお兄と直接会うことも

できてなかつたもん」

「そうだな……」

どうしよう。まだまだこつちにいられるのに。  
それなのに……どうしようもなく切なくなつてるあたしがいる。お兄との時間が楽しいほど、  
別れるのが辛くて。

だから、なんとか今度はお兄にこつちに来てもらう約束を取り付けて、気持ちを和らげよう  
としていた。でも、それでも、辛いよ。

「あむつ……んーっ、あまーい！ わつ、すゞつ、すごい美味しい！ 生地はほろ苦いのに、チヨ  
コが思つたよりしつかり甘くて、いいね、これ！」

「うん、僕も好きなんだ。それに、しつかりチヨコが入つてゐるのにそんな高くないし」

「ええ……それは言い過ぎでしょ」

「いやいや、ずっと食べられるもん！」

気持ちを紛らわせるためにパンをかじつたんだけど、それがまた美味しくて、割とあつさり  
と悲しい気持ちは吹き飛んでた。……単純だなあ、あたし。  
「じゃ、最後に！」

「もう3つとも食べたの!?」

「そうだよー。モンブラン！モンブランとコーヒーはまあ、絶対に外れない黄金コンビだよね。んーつ、やっぱ美味しい！」

お兄はちょっと呆れている、というか引き気味だつたけど、でも、二人で話しながらご飯を食べれて、最高の時間だつた……。

同じようなパンが向こうでも食べられたら、食べる度に今日のことを思い出せて嬉しくなつたと思うのに……絶対こんなオシャレなパンはないから、残念。

あつ……でも、料理が得意な美岬ちゃんなら作れたりするのかな……？

あたしもまあ、そこそこ作れる方なんだけど、さすがに家でパン焼く用意はないし……。

「なんて言うか、直接会つてから、楓のイメージ変わつたなあ」

「ええー、こんな大食いと思わなかつた？」

「いや、そうじやなくて」

「…………？」

「ちゃんと普通の女の子なんだな、つて」

「どういうこと？」

「なんていうか、通話での楓はすぐ可愛くて、元氣で、優しくて……どか現実味がないよ

うに感じたんだ。こんないい子が本当にいるんだろうか、つて」

「ええっ!?そ、そこまでじやないでしょ、あたし」

「少なくとも通話の時点ではそう感じたんだよ。……でも、うん。今の楓は普通の女の子で、だからこそ可愛いなって思う」

「お、お兄……」

「改めて、好きだよ。楓」

「あたしも！……じゃなくって、ふ、ふんつ、今頃そんなこと思つたの？」

「なんでそこでツンデレ!?」

「だつてさ！」

「うん？」

「普通に好きって言い合う関係になつたら、それはもうゴールかな、つて。……だから、まだまだお兄との恋愛を楽しんでいたいって言うか……」

「そんなこと……僕はいつまでだつて、新鮮な気持ちで楓を好きって言えると思うけどな」

「そういうとこやぞ！」

「ええつ？」

「……そういうとこが、好きなんじやん」

「あたし、本当にこの人のこと、好きだなあ。

改めてそう思つた。

「ね、お兄。あたしがゴム、付けさせたげよつか?」

「え、ええつ……」

「あつ、反応したあ。でつかくしたおちんちん、ピクピクーって動いて可愛いねー」「か、楓、そういう冗談はさ……」

「したげるよ。んつ」

顔を赤くしているお兄を笑いながら、個包装されたコンドームを取り出すと、それを口に咥えて見せる。

「こういふの、ふひなんでしょう?」

「そ、そんなことないけど……?」

「ほんほお?」

「べ、別に、エッチだと思つてないし……」

「ふーん、ほうなんだく」

ビリビリッと袋を破つてゴムを取り出して、それをお兄の先端に被せた。

「こつからあ……んむつ、むぐぐつ……! こういう感じ……?」

「うあつ……! ?」

よくわからぬいけど、口で入り口を咥えて引っ張つてみたりして、なんとなーくコンドームを被せていく。

もうビンビンに勃起しているモノだから、ちょっと動かすだけでいい感じにファットして……あつという間に濃いピンクのゴムに包まれたお兄のちんぽが出来上がった。

「ね、お兄。ゴム使ったエツチも結構したけどさ」

「うん……」

『コンドーム被つたおちんちんって、結構エツチだよね』

耳元でそう囁くと、お兄はびっくりしてのけぞつた。でも、逃してあげない。ぎゅっと抱きついて、もつと耳元で。

『エツチなゴムちんぽ、どうされたい？どうやつて、気持ちよくしてほしいの？』

「か、楓……」

『どんなのでもいいんだよね。お兄、あたしのこと好きだから。ふーっ……』

「うわあつ!?」

最後に思いつきり耳の穴の中に息を吹きかけて。女の子みたいな声を上げるお兄を押し倒した。

……もう、あそこはぐちよぐちよになつてる。早くシたくて、仕方ないの。

「お兄、騎乗位で情けなくイツちやおうね。女の子に翻弄されて、どびゅどびゅーって」「んつ、うああつ!?」

「はううんんつ……!!」

お兄の腰の上に座るようにして、中に咥え込む……。

大きなちんぽがメリメリメリツて膣肉をかき分けて入つてくる感じが、すぐ……気持ちい。

多分こういうのって、物理的によりも精神的にイイんだと思う。だつて……。

「はうううんつ!!お兄、いいよおつ!·これつ……んふあああああつ!!」

「あつ、くつ、楓つ……!!」

「お兄も気持ちいいんだね?ちんこ、すつごいパンパン……精液早く出したいんだ。ゴム風船びゅーつて膨らませちゃいたいんだよね?」

「うつ、くつ、んあああつ!!」

「早くイこ?一緒に楽しく、エツチに……んつ、ふああああつ!!」

腰を大きく持ち上げた後、一気に打ち下ろすと、まるで内臓がひっくり返っちゃつたかのような衝撃と一緒に、気持ちよさがこみ上げてきた。

そして、中が細かく震えて、愛液がいっぱい出てきて……ああ、あたし、イッてるんだ。つて思つた。

「あつ、出るつ……!」

「あはつ、出ちゃうんだねつ……!あたし、一緒にイこ?お兄つ……!ふあつ、くつ、きゅううんつ!!」

お兄にトドメを刺すために、もう一回、ずぱんつ、と奥まで咥え込む。

「あつ、くうつ……！」

「ふあああああんっ！！イツ、ちやつ……！深いの、キちゃああつ！！」

「中でドクン、と温かいものを感じるのと同時に、あたしも激しくイツて……頭の奥まで痺れる感覚があつた。

……やつぱり、すつごく気持ちいい。おかしなつちやうぐらい、好きつ……。

「ひつ、あああんんっ！！ま、まだ、いくの止まんないっ！これ、あつ、ひくううんっ！！」

「つうつつ……！楓の中に、搾り取られてつ……くううつ！」

お兄の射精も、まだ止まんないみたい。……可愛いなあ。

よくわかんないけど、きつとお兄は早漏さんだとと思う。でも、それが悪いとは思わなくて……むしろ、すつごく可愛くて魅力的だ。

だから、あたしも何度も、いくらでもイかせてあげちゃう。……あたしも嬉しいんだもん。

「はあつ、はつ、はあつ……！」

「お兄、お疲れー。はつ……うつ、ううんつ……えへへつ……また軽くイツちやつた」

腰を上げて、お兄のモノを抜かせてあげる。

……コンドームはぐつしより濡れていて、抜いたあたしの膣口からも、愛液がいっぱい出てきちゃつていた。

「じゃ、ゴム取つてあげるね」

「う、うんつ……」

「あははつ、恥ずかしがらないんだ?」

「あつ……」

「いいよ。したげるから」

さすがに上手く口で取るなんてことはできな~~き~~うだつたから、普通に手で取つて……それから。

「んつしょ、こんな感じかな」

「楓……?」

「あむつ……どふ?」こういふのは?」

「うあつ……?」

ビクンツとむき出しのお兄のちんぽが震えた。それから、つーつて先走りも。

「んふふふこういふの、すひなんは?」

「べ、別に……」

「ほんほかな~?」

「そ、それより、もういいだろ……」

「んつ、そだね。……またビンビンになつちやつたお兄のちんこ、出させてあげるね……」

「うわあつ!?」

「ちゅぶあつ！ちゅつ、ちゅるじゅじゅうつ……れるじゅつ、ちゅうつ……ちゅつ、ちゅれ  
ろおつ……！」

恥ずかしがつて顔を背けようとするお兄の股間に頭を突っ込んで、ちんぽを思いつきり咥え  
込んだ。

えつちな味に、えつちな匂い……お兄の欲望が、全部詰まつた場所。

「ぢゅるじゅずうつ……ずつちゅるつ、ちゅうつ……ちゅれるつ、れるじゅうううつ！」

「ふつ、ああつ……！やば、出るつ……！」

「んふつ……れるじゅろおおつ!!ずつ、ずずるうつ、ちゅつぷつ、ちゅるじゅうつ……ぢゅつ、  
じゅろおつ……!!」

「うつ、ああつ!!」

「んむうううううつ!!」

お兄はすぐにまたちんぽをパンパンに膨らませちやつて、あたしの口の中に精液を生中出し  
しちやつた。

「んむううつ……！んぐつ、くつ、ゞくつ、ゝくつ……んつ、ちゅぱつ、れろおつ……」

「か、楓、全部飲んで……？」

「んふつ……美味しかつたよ、お兄」

「楓、その顔……」

「えつちだつた？」

「うんつ……ヤバイかも……」

「あははつ、じやあさ、もーつとエツチなことしちやう？」

「ど、どういうの……？」

「そだねー……」

言いながら、辺りを見渡した。エツチの時があたしつて、かなりライブ感で動いてるから、こういうこと言いながら何も考えてなかつたりする。

「これ、お兄のオナホでしょ？」

「えつ!? ちゃんとベッドの下の奥の方に隠して……」

「あははつ、別に見つけてないのに、自白しちやつたねー！」

「か、楓ー!!」

「はーい、はつけーん！じや……オナホコキ、しちやおつか？」

「い、いや、それはヤバイつて……！それ、結構きついの買つちやつたのに、楓にされたら…

…

「あたしにされたら？」

「……楓に失望されるかも」

「あははははっ！一瞬でイツても何も思わないって！……むしろ、嬉しいなって思うよ。あたしでそれだけ興奮してるんだって」

「そう……？」

「うん。お兄はあたしに劣情を催して、一瞬でイツちゃうんだなーって思うだけだもん。彼女にオナホでちんこくちゅくちゅされたいって普段から思つてるつてだけだもんね。うんうん」

「そ、そういう訳じやなつ……うああつ!?」

「はーいっ、ちゅつちゅつ、ちゅつちゅつ……」

「うつ、くつ、んあああっ!!」

「はい、どぴゅー！……お兄つてば、本当に一瞬でイツちゃつた」

「そ、その軽蔑するような視線、やめつ……あつ……」

「あはっ、追加で射精しちゃつたー！」

「も、もう、なんとでも言つてください……」

「あはははは……ありがとう、大好きだよ、お兄」

あたし、本当にこの人のこと、大好きだなあつて。  
そう、思うんだよね。

# 小さな一日

2020年11月26日 初版

## 奥付

著者 Wedge White  
URL <https://wedgewhite.com>  
E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
[\(http://tokimi.sylphid.jp/\)](http://tokimi.sylphid.jp/)